

そこで考えてみると、投稿された文に書かれた「学校不要論」は一体どこからでくるのだろうか。「……原因はたいいてい学校にあり……」という話からこのように結論づけたのなら、余りにも早合点であったと思う。当をえていない悪口を言われるときは、たいいてい“学校(=教師)がだめだから”という図式が多いので、ゲストは“教師のせいだ”と批判しているのだとは受け取ったのかも知れないが、話を少し聞いていけば、「……原因は学校に行くべきだ、行かなくてはならない、行かないのは落ちこぼれた人間だ、ダメな人間だ……」という暗黙の大前提が、本人にも家にも教師にも社会にもあるので「登校拒否」が起こるのだ。「もちろんそうならないように、しばしば原因となるいじめ・体罰・差別などを無くし、管理体制を改めていかなくてはいけない。」「そうってしまった時、極端に追い込んでしまうと、長期間閉じ込められてしまったり、反抗して暴力をふるうようになる。」「登校拒否」は社会のひずみ、教育のゆがみなどから自分を守る自己防衛本能的な行動で、むしろ正常なものと考えべきだ。」という見方がわかってくる。

もし、「学校不要論」者であるなら、教師の悪口をとうとうとのべるだろうし、

「兆候は注意深くしていればわかることもあるので、適確にチャンスをつかえば大事に至らないで済むこともある。また、小学生のうちならこじれないでうまくいくことも多い。」などというアドバイスをすることは少ない。

また、投稿された文の最初の4行「学校は腐ったりんごだから…「識者」の発言がある。」は、あたかもゲストがそう考えているというふうに読み取れる表現で、これは非常に誤解されやすいと思う。

先の投稿された方が、ゲストの経歴、大会要項での紹介、著書など前もって少しでも目を通されれば、どのような人かおよそ察せられるのではと思うと残念である。

「登校拒否」についてあまり知られなかった私が、ゲストの推薦された「登校拒否を問い直す」(ゲスト、丸木政臣編、星林社)を読んでみて、少しずつではあるがわかってきたような気がする。まだの方には是非ご一読をおすすめしたい。



世界トイレマップ

西山 豊 (大阪)

1. 「私語」と「出席」

最近の大学事情は、講義での私語に悩まされることと、一般科目にまで出席重視が増えていることである。学内の試験も面白い。持ち込み可、不可、自筆ノートに限るなど、きまりが年々細かくなってきている。この傾向は全国的らしい。ここまで来たのかとため息をつく。これも、中学、高校での管理教育の影響であろうか。おとなしく、受動的な学生が入ってくる。型破りの学生は稀である。

この路線でいくと、大学は高校の延長になってしまう。私は、管理教育に反発して講義を行っている。出席は一切取らない。最前列で『少年ジャンプ』を読まれようが怒らない。居眠りしている学生を無理におこすようなことはしない。「気が向いたら出席しなさい。私の講義で単位を落とした者は一人もいない。でも落ちた者はいる。自ら落として欲しいと願い出た者ぐらいだ」と、こんな受けないジョークをいうの

で、私語で講義が妨害されたことはほとんどない。

学生は勉強をしない者とみるか、勉強をする者と見るかによって教育の仕方が変わってくる。前者に立てば性悪説で、管理教育になってしまう。教育は性善説でしか成り立たない。

国際化、情報化は大学でも叫ばれている。大学入試志願者の18歳人口が激減する時期に、いかに生きのこれるかと四苦八苦している。そのために国際関係学部や情報学部が新設されたりする。文部省の指導もあろうが「国際化とは英語が話せるようになり、情報化とはプログラムが書けコンピュータが操作できるようになることだ」と、短絡して考える傾向がある。

本当は、それぞれの国の文科や歴史を理解し、お互いを理解し合いながらつきあえるようになること、ものごとを整理して順序だてて考える思考法を身につけることだと思うのだが、この主張はなかなか通りにくい。

2. 「Q・A」という雑誌

私は、情報処理の講義とゼミをもっている。前はノルマであるから、仕方なく真面目にやっている。後のゼミは自分の裁量に任せられて好きにやっている。

●こ・そ・あ・ど／んなこと●

ゼミの時間は一番面白い。これは、学生のためにあるのではなく、私自身のためにあるといってもよい。手品あり、クイズあり、パズルあり、特許ありのなんでもありだ。ただ面白ければよいのだ。研究、教育の原点は疑問や好奇心であるからだ。

だから一冊の本を1年かかって読み、担当者がレジュメを作るといこともない。ここでも出席を取らない。20名のゼミ生は多すぎる。国公立の場合は2～3名のゼミもざらである。教員が学生数を上まわるといこともある。

私は声帯が弱いのでしゃべるのには向いていない。20名のゼミ生の出席をなんとか減らそうと努力している。「形式、内容は問わない。自分で見つけたテーマで研究し提出物を出しなさい。単位をあげるから」と、なるべく出てこないように指示している。

平凡から出している雑誌に、思考全開マガジン『Q・A』というのがある。380円と値段のわりには、中身がある。1988年5月号に「トイレ大ウンチク学」というのを特集していた。その中で「世界トイレマップ」というページがあった。私は、これこそ「国際化」の教材にふさわしいと思った。

文科人類学としての興味もあったし、イラストが強烈でウィットがあった。これな

らいけると思った。先制攻撃を加えてゼミ生の出席を減らそうというのだ。

芸の世界では「しもネタは最低だ」という通説があるが、いちおう学問の府として許していただこう。

3. 物知り度と表現力

まず黒板に今日のテーマは、生活に一番関係の深いものをやろうといいながら、

快○ 快○ 快○

と書き、○に漢字を入れさせる。日本古来からの健康法である「快食、快便、快眠」を期待しているのだが、この通りには書かない。私をだしにして学生が遊んでいるのかも知れない。わざとはずしたりする。

でも、統計的に見ると「楽」を入れる者が多い。これも、快楽主義の世相を反映しているのだろうか。

次に言葉をいくつ知っているかを試す。物知り度のテストだ。「トイレ」の用語と「ウンチ」の用語についてである。幾つでもよい。多ければ多いほどよい。少ない者は2つか3つ。多い者は9つぐらい書き上げる。日本の方言や英語や中国語まで出てきて面白い。学生に教えられることもある。

国語や社会の時間が終わると、次は美術の時間だ。そのものを絵で表現しなさいという。いやな顔をしながらシブシブ描き始

●こ・そ・あ・ど／んなこと●

める。ところが、漫画倶楽部の学生がいて、トイレ一式を描きあげ、湯気は出すは、ハエは飛ばすは、実にリアルに描くので、これでは押し切られそうなので、この設問は失敗したかな、と反省する。

「とぐろ」の3層というのが標準形である。5層も描くのもいるが、それはメシの食い過ぎだ。それにしても、「とぐろ」状は、実体には即していないように思うのだが、どうだろうか。また機会があれば調査・研究してみよう。

4. 真の国際化をめざして

ここまではウォーミングアップ。これからは、国際化のはなし。

日本人の感覚でいくと、トイレは和式と洋式で、トイレトペーパーで後処理をするという程度だ。でも明治以前は洋式はなかったし、紙は貴重なものであった。

世界は広い。各民族は気候風土や生活習慣にあわせた方式をもっている。インドでは、サウジアラビアでは、ソ連では、アメリカ・インディアンは、ブラジルでは、韓国では、中国北部・黄土地帯ではと、つぎつぎと質問をあげせる。ある種の連想ゲームである。

きわめつけは、アフリカ・サバンナ地域である。ここは棒とロープと川しかない。

これは、読者も想像して下さい。

こうして、十分楽しんだ後、プリントを配布しゼミは終わる。学生には興奮と余韻が残る。私は、何もなかったかのような顔をして研究室にもどる。

こういう事をやると、うわさはすぐ学内に広まる。ある学生が「先生のゼミではウンチまで描かせるの」とたずねる。すかさず「表現力を試しているのだ」と答える。「これは文化人類学の重要なテーマである」ということも強調する。いまや鈴木了司『トイレ学入門』光雲社などという本まで出るくらい、立派な学問として位置づけられているのだと。

数学の授業も毎年同じことをやっている。と教える方も飽いてくる。「今日は、数学と違うことをやろう」と言って、このネタで授業をされてみてはいかがですか。年に1回ぐらいは、「数学の先生って意外と幅が広いのね」と生徒に受けるかもしれません。「こんな恥ずかしいことやれませんが、この特集の雑誌を私は、大切に保存していますので、コピーの必要な方はご連絡ください。お待ちしております。

(大阪経済大学)